

私の「失敗学」

中公文庫に「失敗の本質」という本があります。第二次世界大戦に日本が敗れた理由を、日本軍の組織の中に探った本です。難しい本ですが、あとがきには「日本軍の失敗の本質とは、環境の変化に合わせて自らの戦略や組織を主体的に変革することができなかったということだ」と書かれています。日本軍の場合、各組織の調整ばかりに力を使って、状況をみながら組織を変えていく意思を育てることができなかったとも指摘されています。軍隊は戦争をする組織ですから、その失敗は将兵の命に直接関わることになりました。

さて、失敗については、畑村洋太郎さんという技術者が「失敗学」という学問分野を開拓して、たくさんの面白い本を書いています（「失敗学実践講義」講談社文庫など）。畑中さんは、列車や航空機、原子力機関などの大事故を分析して、そこから学ぶべきだと言っています。科学技術はさまざまな利便性を私たちの生活に与えていますが、一方で大きな事故でたくさんの命を奪ってもいますから（1985年の日本航空機墜落事故は知っていますか？）。

失敗したときにきつく叱ると、次に叱られて嫌な思いをしたくないから、失敗しないようになる…と考える人もいます。体罰の正当化に使われることもある考えですね。確かに痛い思いをしたことについては、また同じ場面に遭遇すると失敗しないように慎重に行動します。しかし、叱られたり、痛い思いをしないように気をつけるあまり、どうしたら失敗しないのかということや、さらに失敗の中にある成功のきっかけのようなものに気づく機会を失うことにつながると畑村さんは指摘しています。

私がいろいろなところで紹介する、九州佐賀県の県庁に勤める円城寺雄介さんのことばがあります。「どんな失敗もそこから学ばなければただの失敗だが、学べるものがあればそれは失敗ではなく「経験」である。」私は話も下手だし、相手に応じて仕事の仕方を変えたりすることも苦手で、仕事でよく失敗をします。これまでもたくさんの失敗をしました。しかし、この円城寺さんの言葉を知ったとき、失敗してもいいから失敗を糧に学んだことを、人を育てるために活用しようと思いました。今は副校長先生や教頭先生の研修会などで、自分が失敗から学んだことを積極的に話すようにしています。これが私の「失敗（から）学（ぶ）」です。

この「校長室より」は、生徒のみなさんにこの地域の歴史や地理に少しでも関心をもってもらいたいと、赴任当初から発行してきました。途中コロナ禍の中で、みなさんが学校にいない臨時休業の時には、私の学生時代の思い出なども題材にしました。また、その時から紙での配付をやめて、ホームページ掲載とGoogle classroomでの配信に変えました。

ホームページに掲載したことで、昔の知り合いや教え子などから久しぶりの連絡をもらうこともあり、ネットの力をあらためて実感しました。ただ、自分の心の中にだんだんと書きたいことがなくなり、また新しいことを調べようという気持ちが小さくなっていると感じています。だらだらと書き続けるより、このあたりで一度終わりにするのがいいのではないかと考えました。「校長室より」今号でおしまいです。